

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	Section of Neuroradiology, Diagnostic Radiology, David Geffen School of Medicine, University of California, Los Angeles: UCLAでの素晴らしい研究者との出会い
別タイトル	Section of Neuroradiology, Diagnostic Radiology, David Geffen School of Medicine, University of California, Los Angeles: Encounter with great researchers in UCLA
作成者 (著者)	平田, 容子
公開者	東邦大学医学会
発行日	2014.11
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 61(6). p.285 286.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	世界の研究室から
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.61.285
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD37414776

Section of Neuroradiology, Diagnostic Radiology,
David Geffen School of Medicine,
University of California, Los Angeles

UCLA での素晴らしい研究者との出会い

平田 容子

東邦大学医学部脳神経外科学講座 (大橋)



私は現在、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles : UCLA) デビットゲフェン医学部診断放射線科神経放射線部にて、神経画像の臨床研究に従事している。2013年8月から機会を頂き、1年余りが経過した。

私の所属している放射線科は、アメリカでは内科や外科と並ぶ主要な科で、人気の高い専門の1つである。さらに、臓器ごとに専門が細分化され、それぞれに専門医が存在する。

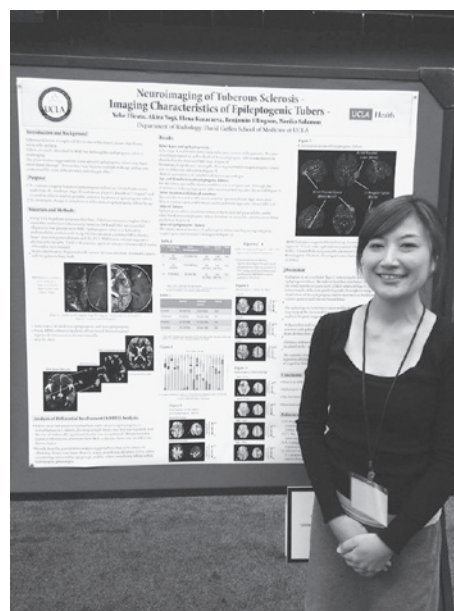
私は、その中の神経放射線科で研究をさせて頂いている。神経放射線科の教授である、Dr. Noriko Salamon は、日本で放射線科に従事された後、フランス留学を経て渡米。アメリカの医師免許を取得され、レジデントから経験された後、UCLA で Neuroradiology の教授までなられた方である。Dr. Salamon が手掛けている研究の1つに、てんかんの術前焦点診断のプロジェクトがあり、私は幸運にも、そのプロジェクトに参加させて頂いている。

UCLA にはてんかん治療のチームがあり、多くの患者が診療を受けている。チームは脳神経外科のてんかん外科を中心に、神経内科、小児神経科、神経放射線科、精神科、神経心理士、看護師で構成されている。週1回のカンファレンスでは、手術症例について術前の検討を行っており、科を超えた、そして医師と医療スタッフの素晴らしい連携を目の前にし、学ぶことが多い。

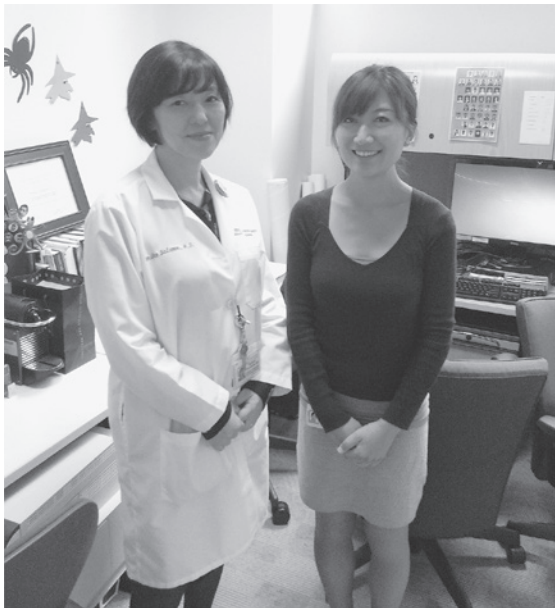
私の研究のテーマは、小児の主なてんかん疾患の1つである、結節性硬化症 (tuberous sclerosis complex : TSC) の患者群について、術前の画像を中心とした焦点診断についてである。研究をするに当たり、Dr. Salamon の指導を仰ぎながら、その共同研究者である、Dr. Ellingson の研究

室の協力を得ている。彼は、magnetic resonance (MR) physics の専門家であり、放射線科の assistant professor として、画像を駆使した研究を行っている。

研究室には、博士号取得を目的とする、UCLA の学生が研究員として所属している。彼らは magnetic resonance imaging (MRI) や positron emission tomography (PET) を中心とした臨床研究を行っている。医学部の学生を始め、物理学部などさまざまな学生で構成される。画像解析の技



2014年5月、カナダ・モントリオールでの52nd American Society of Neuroradiologyにてポスター発表



Dr. Salamon のオフィスにて

術に関して、彼ら自身が非常に高い能力と技術を持っており、解析のスク립トを自身で作成するなど、優秀な人材ばかりである。そのような学生達に、画像解析手法の手ほどきをして貰うことによって、自分のプロジェクトを遂行することができる。私を含め、研究留学している医師は現在、他に日本人1名とドイツ人1名の2名おり、彼らもこの研究室の技術を学びながら、研究を進めている。

このような研究グループに参加させて頂き、専門技術を持ち寄ることで、チームで1つのプロジェクトを遂行することの醍醐味、そして人々との係わり合いのあたたかさに触れるという貴重な体験を味わっている。今後は研究の論文文化に向け、さらに気を引き締めていこうと肝に銘じている。

最後に、このような素晴らしい機会と援助を頂いた、わが東邦大学、そして脳神経外科学講座（大橋）岩淵教授、何よりも医局の先生方に心から感謝を申し上げたい。